

實踐哲學としての一念三千

守 屋 貫 教

日蓮聖人が『事の一念三千』として唱導せる處のものを、今茲に『實踐哲學としての一念三千』と題して究明せんと欲するものであるが、先づ第一にその實踐哲學の意味を明にするの必要がある。アリストテレスが哲學を區分して理論的部門と實踐的部門との二つとなして以來此區別は今日尙人々の踏襲する所であるが、その理論的部門とは智識の問題であり存在の問題であり、實踐的部門とは人生の問題であり價値の問題である。日蓮聖人は天台智者大師の摩訶止觀所立の一念三千の法門を理の一念三千と名け、之と甄別して自の所立を事の一念三千と名けられたのであるが、その事の一念三千の中心生命は實踐であり、天台大師の理の一念三千を社會的に實現して、いはゞ人生問題の解答とすることに依つて初めて事の一念三千と呼ばれたのであるから、之を實踐哲學と名くるに於て敢て妥當ならずとはいへない。勿論それが爲めに天台大師の一念三千を理論哲學として片付けるわけではない。唯兩者を比較するとき實踐哲學は事の一念三千に冠せらるべきであるとするものである。

一念三千の法門は、天台大師が五十七歳の夏荊州の玉泉寺で摩訶止觀を講じ、その第五卷の正觀章に至つて初めて明にされたもの、所謂大師の己心中所行法門といはるゝ所のものである。其本據とは、

夫一心具三十法界、一法界又具三十法界、百法界。一界具三十種世間、百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已。介爾有心即具三千。亦不言一心在前一切法在後。亦不言一切法在前一心在後。……今心亦如是。若從一心生一切法者。此則是縱。若心一時含一切法者。此即是橫。縱亦不可。橫亦不可。祇心是一切法、一切法是心。故非縱非橫。非一非異。玄妙深絕、非識所識、非言所言。所以稱爲不可思議境。意在於此。云々

止觀にあつては、十境を立て、觀法の對象となし、その各々について能觀の法として十乘觀法を用ゐて修行する。觀不思議境といふのは十乘觀法の第一に位するもので、凡ての觀法の根本となるものである。十境の内初めの陰界入とは吾人現前の法であるが、その五陰十二入十八界尙廣くして觀境に適しない。それでその内の五陰を取り、五陰の中更に餘の四陰を措いて識陰を取る。識陰とは心法であるから觀念論的立場であると見て差支ない。但し西洋哲學に在つては論理的思惟がその方法であり、佛教にあつては證悟をその目標とする。そこで現前の一念の心性を取つて、所觀の境となし、この心三千を具して不思議なり、玄妙深絶識の識る所にあらず言の言ふ所にあらずと觀する。是即ち一念三千の觀法である。

二

法華經を以てその生命とせられた日蓮聖人は、先師として最も多く天台大師に傾倒せられた人であつた。聖人がその開目鈔に於て『されば日蓮が法華經の智解は天台傳教には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はおそれをもいだきぬべし』（縮刷遺文七七二）といひ、其遺文到る處に天台傳教の兩大師を稱揚し、法華宗内證佛法血脈（同九二三）には外相承として天台大師を高祖となし、顯佛未來記には『天台大師信順釋迦、助法華

宗_一敷_二揚震旦_一、叡山一家相_三承天台_二、助_三法華宗_一弘_二通日本_一等云々。安州日蓮恐相_三承三師_一、助_三法華宗_一流_三通末法_一、三加_一一號_三三國四師_一。(同九七八)とあつて、いつでも兩大師を法華經の行者の先輩とされて居る。然しながら天台大師の到達點は即ち日蓮聖人の出發點であつたと思ふ。そしてそれをハッキリと示されたのは觀心本尊鈔である。觀心本尊鈔副狀には『觀心法門少少注_レ之、奉_二太田殿教信御房等_一。此事日蓮當身大事也。……佛滅後二千二百二十餘年未_レ有_二此書之心_一。不_レ願_二困難_一期_三五五百歲_一演_三說之_一云々。(同九五七)とある。その觀心の法門とは、事の一念三千で、天台大師の理の一念三千と區別せらるゝ所である。大師の一念三千とは座禪觀法に依る證果であるから、假令その内證に於て相通する所があつても、聖人が之を理の一念三千となし、自らの立場に依る成佛の要道を事の一念三千と呼ばれたものである。聖人はその三十二歳のとき法華經の行者として出發されたのであるが、更に三十九歳の時鎌倉幕府に對して立正安國論なる宗教論策一篇を獻上された。此立正安國論は、單に幕府を練曉した獻白書でなくしてその形式に於てもその内容に於ても聖人の一代を通ずる宗教運動であつたのである。法華經の實踐運動であつたのである。それ故に聖人は爾來この立正安國の主張を以て國と人々とに相對された。就中立正安國論中に豫言されたる他國侵逼難の適中を契機として、文永五年から八年へとかけて、猛烈なる立正安國の運動をされたのである。撰時鈔(同一二四一)に『余に三度の高名あり』といふて居られるのは、聖人の一代の聖業が以て立正安國の實踐運動に始終して居ることを證すものである。その他立正安國論を再演しその運動を高調せる著述としては、文永五年の安國論御勘由來があり、同六年の安國論奥書があり、文永十一年の顯立正意鈔等がある。尙御臨終の前にも立正安國論を講ぜられたと傳へて居る。更に私共が甚深の注意を拂はねばならぬ事は、聖人の宗教的迫害が悉く立正安國論獻上並にその後の立正安國の運動から起つた事である。大難四度小難數を知らずといふそれ等の迫害は、悉く立正安國論の惹起

せる宗教的迫害である。立正安國論なかりせば聖人の宗教的迫害も或はなかつたかも知れない。

それで聖人は天台大師の如く、所謂徒衆を謝遣して山谷に隱遁し、採果汲水觀念觀法を凝らされたといふ風に見えないけれども、この立正安國論の運動に於て一身を日本國に打覆ふて、有ゆる患難迫害に身を晒された處が即ち聖人の十法成乘の觀法ではなかつたかと思ふのである。聖人が最初伊豆に流罪せられた迫害生活は聖人に取つて止觀の境致であつたのである。流罪生活の中に聖人は自覺と反省（或は感謝と懺悔）の宗教生活を送られた（同四一七―四二四）。その感謝と懺悔との生活の中から、聖人の眞の宗教的確信は創造されたのである。教機時國序の五綱の教判是である（同四二四―四二九）。それから文永八年九月十二日の龍口の巨難並に佐渡への遠流は聖人一代の大難であつただけに、聖人の内證は多く其處から顯發されて居る。佐渡へ流されて翌年の二月、雪中の塚原三昧堂にあつて世界の盲目を開かんとて書かれた開目鈔を見ると、一間四面の三昧堂の雪の中に飢ゑ凍えつゝ、その境涯から油然として涌き出で來る本化上行の大自然と、吾が身の過去生の罪業のみならず、萬人の罪に代らんとする懺悔滅罪とが表裏あざなへる繩の如くに、伊豆の時よりも層一層明瞭に明白に顯はれて來れるを觀るのである。斯の如きは迫害の最も慘憺たりし佐渡の流罪生活が、聖人に取つて止觀のこよなき對境であつた事を物語るものでなからうか。聖人の止觀を凝らす境界は徒衆を謝遣し山谷に隱るゝものでなくして、社會に出でて人々に打交りつゝ、誠には國家社會を諫めて、そして迫害されて患難の流罪生活を送られたその當所であつたのである。それ故晚年身延に隱棲して九ヶ年の靜寂なる生活を送られた時も、その生活は伊豆や佐渡の流罪地にも等しい生活であつた。所謂誓願配流の生活であつた。そこに聖人は曾て身で讀んだ法華經を晝夜朝暮に讀んで、只管佛に仕へ佛とのみあかし暮された。曾て佐渡に於て圖顯せられた佛滅後二千二百二十餘年未曾有の本尊を對境として唱題三昧して暮された。それが聖人に取つて止觀の境地で

あつたのである。

三

聖人は上述の立場を事の一念三千といふて居られるが、事とは事實であり、觀念を事とする理と區別すべきものである。草山の元政上人の十六字觀といはるゝ『觀_レ即_レ色心是爲_二理觀。觀_レ即_レ心色是爲_二事觀。吾臂三折得_二此十六字_一』とは、能く事と理との區別を道破して居ると思ふ。事と理との區別は、山林に隠れ個人的に行ひすますのと、進んで社會に出で國家社會に妙法を實現するとの相違である。理觀としての一念三千觀に於ては、幽界の三障四魔を退治するのであらうが、社會的實現に於ける事の一念三千は三障四魔は勿論の事人間悉くが惡魔となり惡鬼となつて障礙を爲すのであるから、尋常一様の決心覺悟で出来るものでない。治病鈔(同二、一〇三)に

止觀の十境十乘の觀法は天台大師説き給ひて後行する人無し。妙樂傳教の御時少く行すといへども敵人弱きゆへにさてすぎぬ。止觀に三障四魔と申すは權經を行する行人の障にはあらず、今日蓮が時具に起れり。又天台傳教等の時の三障四魔よりもいまひとしほまされり。……一念三千の觀法に二あり。一には理二には事なり。天台傳教の御時には理也。今は事也。觀念すでに勝るが故に大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千也。天地はるかに殊也こと也。

とある。斯の如きは全く聖人自らの經驗を語られたものでなくて何であらう。聖人が伊豆の流罪地に於て懷かれた觀念、小松原の刀杖の下、龍口の首の座、殊には佐渡の流罪地で屢々殺されんとしたる間に懷かれた觀念とは茲にいふ觀念すでに勝るの觀念であつたらうと思ふ。かやうに聖人の一念三千觀は多く迫害生活の艱難流離の間に出來あがつたもので、事觀の妙味は全く其處に存すると思ふ。

茲で私は聖人の信仰論に觸れて見たいと思ふ。聖人の宗教心理論は天台大師に據られて居る。識分の研究に於て、眼耳鼻舌身の前五識と第六識とは凡夫識であり、第七末那識は二乗識であり、第八阿耨耶識は菩薩識であり、第九庵摩羅識は佛識であるとされてある。聖人は日女御前御返事に『此御本尊全く餘所に求むる事なかれ。只我等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる胸中の肉團におはしますなり。是を九識心王真如の都とは申すなり』(同一、六二六)といはれて、信はこの根本心の發動なりとするのである。法華經並に聖人に従へば、その本尊といふのは宇宙法界の根本法であるから、これと相對する信もまた根本心でなければならぬ。

少しく宗教哲學者の所説を引いてこれを解釋すると、シュライエルマツヘル(自己外通過)との連続せる變化である。前者は意識であり後者は行爲である。意識は亦二つの異なる形式を取る。即ち知識と感情とである。知識は認識されたものとしては自己の *In sich bleiben* (自己内滞在) と *Aussichheraustreten* (自己外通過) との連続せる變化である。前者は意識であり後者は行爲である。意識は亦二つの異なる形式を取る。即ち知識と感情とである。知識は認識されたものとしては自己の *In sich bleiben* であるが、認識としては自己の *Aussich bleiben* に依りて現實となる、その限り行爲である。之に對して感情は感動されたものとして *In sich bleiben* たるのみならず、感動するものとしても感受性のもので全く *In sich bleiben* に屬する。』(基督教信仰論) されば彼は信仰を定義して、『信仰とは智識に非ず行爲に非ず、感情即ち直接自己意識の規定である』とするのである。ナトルプも亦宗教を感情の立場から説く點に於てシュライエルマツヘルに賛するものであるが、彼はその宗教心理論に於てかういふて居る。『人間意識に於ける宗教の基礎は感情である。而も感情は認識、意志、藝術的想像と相對立する意識の一領域にあらずして、寧ろ精神の根本力と考ふべきものである。其は精神生活の最も内面的のものである。認識、意志、藝術的想像は唯外面的のものに過ぎない。然るに感情は其最後の根據であり、其等を包括するものである。感情の此 *Urelement* に於て宗教はその生命を有するものである

と。(人道主義の限界内に於ける宗教) 此シュライエルマツヘル並にナトルブが信仰を精神の根本力と見る點に於て聖人の信と相通するものがある。然しながらその感情を以て宗教心の根據なりとする點は、佛教特に聖人の立場とは遠く相去るものである。

更にヘーゲルはシュライエルマツヘルの感情論を批判して、『感情は一應宗教信仰の住家として相應しき點がないでもないが、感情なるものは随分我儘勝手なものである。感情の中には神も入れば惡魔も入る。斯く神との必然的關係にあらぬものが、神の住家たることは出来ない。神と必然的關係にあるものは思惟であり概念である』と。(宗教哲學序論) ヘーゲルが思惟若くは概念を信仰の座として、神との必然的關係にあると説く點は、聖人の信仰論に通ずるものがあるが、彼の餘りの論理化は終に聖人の實踐的なる信仰と相去るものである。

聖人はその信仰に名けて我不愛身命但惜無上道といひ、或は一心欲見佛不自惜身命と呼んで居られる。勿論此等は法華經から出た文字であるが、この文字こそ聖人の信仰を表す最も好適の文字である。聖人の信とはいつでも聖人の全心身をゆり動かした根本力である。私共は聖人の不惜身命の信仰に就て考ふるには、聖人の立正安國論獻上の當時に遡ることを要する。立正安國論の運動は法華經の根本精神から出て居るには違ひないが、之を社會的に見ると、末法思想の漲つて居つた時に際し、日本國と全國民とをゆすぶり動かした前代未聞の天災地變に依つて激發された信仰である。當時の天災地變の慘憺たる有様は安國論冒頭の記事以上であつたといはれてある。當時この災厄に直面した人々は失意の極絶望に陥つたであらう。或は穰災祈禱の末に走つて本當の信に覺めたものは鮮かつたであらう。斯る時に當つて、眞によく世界の危機に直面し、萬人に代つて不惜身命の信を如實に體驗せるものは聖人であつた。そしてこの立正安國論に依つて起された信仰を以てその一代を貫かれたのである。松葉谷草庵の燒打とか伊豆伊東の流

罪などは不惜身命の信なくして到底忍びきれぬ大難である。そしてこの不惜身命の信仰は一難を経る毎に層一層強盛になつて行つたのであつた。龍口で首の座に坐せんとせる時、『不覺のとのばらかな、これほどの悦をばわらへかし』と叫ばれた如きは正にその最高潮に達せるものである。この身命を惜まざる一心の信仰こそ精神の根本力でなく何であらう。それは感情の立場から見た單なる主觀的のものと比較すべくもない。また思索に依つてでつち上げた思惟とか概念とかいふものでない。佛の大智慧大慈悲といふ法界の根本心に通ずる命がけの根本心である。二もなく三もなき純一無雜の一心である。法華經の理その物が純圓一乘であるから之に對する信も純一でなければならぬ。所謂一心欲見佛の一心たる根本心でなければならぬ。その根本心こそ一念三千の佛種を植うべき必然の座である。斯くて信は法界の根本法に相對する根本信たるのみならず、直に成佛の眞因であり妙覺の種子でもある。御義口傳上卷に、

一念三千も信の一字より起り、三世の諸佛の成道も信の一字より起るなり。此信の字は元品の無明を切る所の利劍也。其故は無疑曰信とて、疑惑を斷破する利劍なり。解とは智慧の異名なり。信は價の如く解は賃の如し。三世の諸佛の智慧を買ふは信の一字也。智慧とは南無妙法蓮華經也。信は智慧の因にして名字即也。信の外に解なく、解の外に信なし。信の一字を以て妙覺の種子と定めたり。』

とある。元品の無明とは等覺の最後心の菩薩が之を斷じて以て妙覺の極位に登るのであるから、之を斷ち切る信は尋常一様の信でない、所謂不惜身命の根本信である。最近のバルトの危機神學に於て、信仰者が觀望の態度であつてはならぬ、光と暗との大戦に於て單なる觀戰者たることは許されない。彼は飽迄戰友でなければならぬといふて居るが基督教と佛教と直に同一視することは難しいとするも、聖人の不惜身命の信を幾分表現せるを觀る。

事は實踐であるといふたが、事はまた理觀が法華經の迹門的立場なるに對して、本門的立場に立つものである。迹門的立場に立つ一念三千觀は『下地獄より上佛に至るまで悉く自分に備つて居る。それ故地獄の心も起り佛の心も起るのである。同じ起すなら佛の心を起すがよいでないか』といふような意味で、十界互具といふても、制心從理もので、事實のまゝに觀するのでない。一體迹門で一念三千を立てるが、それは結局理論的な一念三千で所謂理具の一念三千である。本門に至つて佛の久遠實成顯はれて初めて眞の十界互具一念三千といふことが出来ると思つて聖人の考である。その事を聖人は開目鈔に於て發表されて居る、即ち

迹門方便品は一念三千二乗作佛を説て爾前二種の失一を脱れたり。しかりといへども、いまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず。水中の月を見るが如し。根なし草の波の上に浮べるに似たり。本門に至つて始成正道を破れば四教の果を破る。四教の果を破れば四教の因破れぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を説き顯はす。此れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はりて眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。』

迹門に於ける廣博なる理具の一念三千觀には、天台大師の如き自解佛乘の人に取つては可ならんも、これに依つて私共凡愚の能く佛境界に到り得る處にあらず、理觀は終に成佛の直道でない。成道の直道としての實踐哲學は事實から出發しなければならぬ。今法華經本門は凡て事實の上の談道である。釋尊が久遠實成の佛としての無始以來常説法教化の化導とそれに報いられたる我此土安穩の淨土の眞の十界互具の事實の上に立つものである。更に精しくいふと本門の立場は先づ久遠劫來實修實證の佛がある。その佛は過去にも滅せず未來にも生ぜず時空を超越したる永遠の實在、所謂久遠壽量の本佛である。その佛の壽量長遠なる所以は所謂三世益物で永遠に渡りて吾等衆生を佛道に入ら

しむることに外ならない。これ即ち法華經本門壽量品の『佛の顯本』といはるゝ所のもので、この佛の顯本があつて、今の釋迦牟尼佛は今度初めて佛になつたのでなく久遠劫來の佛であることが顯はれると同時に、佛の淨土も諸經に説かれたやうに外の處でなく、やはりこの娑婆世界だといふことが顯はれる。私共凡夫は顛倒して居るからこの世界を穢土と見るけれども、この世界は實には佛の果報に報いられたる寂光の淨土である。それで法華經如來壽量品には、『阿僧祇劫に於て、常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在り、衆生劫盡きて大火に燒かるゝと見る時も、我が此土は安穩にして、天人常に充滿せり。』

とある。本門的立場とは、この本佛と本佛の國土といふ法界の根本的事實の上に私共の修行を置くのである。理觀の如く觀念觀法を通してこの根本的事實を受取らうとしない。その受取りようは、聖人の觀心本尊鈔に於て最も明白に示せる所である。觀心本尊鈔はその序分に理の一念三千を説き、順次に事の一念三千にと移り、これを妙法蓮華經の五字に結歸し、事觀の妙法はこの五字を受持するに外ならずとするのである。所謂

『釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讓り與へ給ふ。』(縮刷遺文九三八)

といふものである。即ち釋尊の因行果徳の二法を自然讓與に依つて受け取り成佛を得るといふのである。これが即ち觀心であり事の一念三千である。

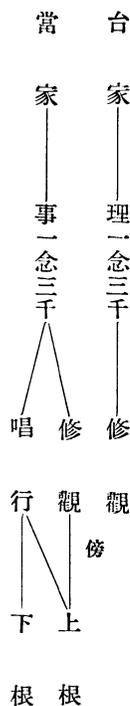
五

今見た如く、觀心本尊鈔は一念三千の事觀を唱題受持に結んで居る。即ち今鈔いふ所の觀心とは天台所説の理の一念三千觀でなく、事行の南無妙法蓮華經』である。即ち觀心即唱題であつて、唱題の外に觀心はないのである。今鈔

題して觀心本尊といふの故を以て、事行の唱題の外に事の觀心あつて天台の理の觀心と相對するが如く考ふるは決して聖人の意を得たものでない。今鈔には觀心を定義して、『觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る。是れを觀心と云ふなり。』(同九三〇)といふてあるので、聖人の意味する觀心も天台の理觀の如く心を境とし事具三千を觀するのであるとするのは、誤れるの甚しきものである。茲にいふ觀心とは天台理觀を説明せるものであつて、之を以て直に聖人の用いた觀心と爲すことは出来ない。聖人のは今鈔に示されたる『我等此の五字を受持すれば』の外ないのである。尤も前に擧げた聖人の治病鈔に『一念三千の觀法に二あり。一には理二には事なり』とあるので、理觀の外に事觀論の哲學を展開せるものである。草山元政、觀如日透、綱要日導、優陀那日輝等の諸師が是である。事觀論の哲學的論證は敢て妨なしとするも、事觀を以て事觀論と考へることは聖人の意を得たものでない。理の一念三千とは一念三千の理を修して心證を高め獨り自ら行ひますことであり、事の一念三千とは佛果上の一念三千を直に人生事實の上に發揮して社會的に之を實現して行くのである。前者は消極的であり個人的であり、後者は積極的であり社會的である。更に一は迹門的であり他は本門的である。即ち理と事と相異なる所以である。その一念三千の事觀を事行の妙法蓮華經の五字に結歸して、之を觀念的方面に向けず事實の上に建立したものが三大祕法である。三大祕法とは『意に念じ口に唱へ身に行ふ法』であつて、山林空閑に靜座して思惟觀念する法でない。またこの三大祕法の外に別に一念三千の觀法を修せよとの教訓は聖人に依つて示されていない。然るに觀如日透師などは、その本門事一念三千義にかういふて居る。

唱題の正行を勸むと雖ども、何ぞ事觀を助行と爲ることを遮せん乎。又行者の意樂時勢に隨つて唱題觀念種々の儀異なるべし。或は座禪の方法を整へ本尊に向ひ奉り、又は直に六塵の法を緣して修觀するもあるべし。或は唱題と

共に念を凝して修観するもあるべし。或は公私遠の間念々修観するもあるべし。或は觀念無く平信に唱行するも、或は唱題の前にも後にも一念修観するもあるべし。種々不同行人自ら知るべし。何れの筋にても一向平生とも觀念ばかりにて唱題せざるは宗祖の立義に背く之を制すべし。さて上下根に配するに必々徧に上根は觀念下根は唱行とは對すべからず。宗家の大綱上下根一同に唱題を正と爲す。中に於て意樂に隨つて上根傍に觀念を修す。下根は但だ信心唱題也。



唱題の正行を勤むる點に於て、事の一念三千の意を失はざるものであるが、唱題受持の外に種々の觀念義を立つることは、修行の當を得たものといふことは出来ない、斯の如きは寧ろ唱題受持の正行を妨ぐるものである。聖人が既に理の一念三千の觀法を實踐的な事の一念三千の立行となし、これを妙法五字の唱題受持に結歸して愈々實踐の極致にまで發揮せるものを、何を苦んでそれ以外の修観を立つるのであるか。唱題を正となし意樂に隨つて上根は傍に觀念を修すとあるは、唱題を輕視するもので結局唱題を正とせざることに墮してしまふ。また唱題を正行と爲すといふとも、本尊鈔には『妙法五字を受持す』とあつて、受持とは身口意の三業に受持することである、唯口にのみ唱ふる事でない。今日の世唱題受持を口に唱ふる事とのみ考へ之を下根の人の修すべきもの位に考へて居る人が多い。そして聖人の創められた唱題受持は唯形式的に唱へられるの觀がある。觀心本尊鈔の結文に『一念三千を識らざるものは、佛大慈悲を起し、妙法五字の袋の内にこの珠をつゝみ、末代幼稚の頭にかけさしめ給ふ。四大菩薩のこの人を守

護し給はんこと、太公周公の成王を攝扶し四皓が惠帝に侍奉せしに異ならざる者也。』(縮刷遺文九四九)といはれた妙法五字、報恩鈔にまた『日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流るべし』といひ遺された妙法五字を受持し實踐する人が乏しい。偶々ありとすれば病氣平癒か或は商賣繁昌かに役立つ爲に過ぎないのである。斯くの如きは信するものゝ罪か、將た信ぜしむるものゝ罪であるか。吾人を以てすれば唱題受持の一行に、既に釋尊の因行果徳の二法即ち萬善萬行は含まれて、その凡てを悉く自然に讓與すとある。そして而もそれは聖人が立教開宗以來法華色讀の跡でもあり結論でもあるから、その唱題受持の一行に全く事の一念三千は含まれて居るのである。この一行から自覺と反省の宗教生活、靜寂、感謝、懺悔滅罪等、その他解脫も生れ佛智も自ら開發されて來るのである。他を顧みることなく一意專念に唱題受持の一行をばけむことに依つて成佛の道は自ら開けるのである。唱題修行を以て下根に適する修行とのみ考へるが如きは誤れるの最も甚しきものである。吾人敢て他の觀念觀法を非議せんとせず唯聖人に依つて立てられたる事の一念三千の本筋たる唱題修行の本領を發揮せよといふのである。枝末に拘泥することとは聽て大本を失ふ所以、聖人の最も戒められた所である。

以上私は日蓮聖人に依つて、人生問題への解答として齎された事の一念三千を、實踐哲學として究明して見た。實踐哲學として單に此に留まらず、進んで事觀論の哲學をも叙すべきであらう。先きに挙げた草山元政、觀如日透、綱要日導、優陀那日輝等の諸師の論議がそれである。私の研究はそれ等の全般に渡つて徹底して居らないからそれ等は之を後日に期する事とする。